

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：13501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370447

研究課題名(和文) 形容詞および副詞二次述語に関する日英語比較統語論研究

研究課題名(英文) A comparative study of the syntax of adjectival and adverbial secondary predicates in English and Japanese

研究代表者

松岡 幹就 (MATSUOKA, Mikinari)

山梨大学・総合研究部・准教授

研究者番号：80345701

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 700,000円

研究成果の概要(和文)：日本語および英語の形容詞述語が、その主部として機能する名詞句と、どのような文節構造で結びついているかを研究した。特に、動作の結果状態を表す形容詞や、動作主が認識した物の性質を表す形容詞について考察した。結果状態を表す形容詞については、日英語で、文節構造上の異なる位置に現れるという結論に至った。また、動作主認識の形容詞については、結果状態を表す形容詞と意味的にも構造的にも区別されるということを論じた。

研究成果の概要(英文)：I have investigated how predicative adjectives are associated with their subject nouns in phrase structure in English and Japanese. In particular, I have focused on adjectives describing a result of an act and those expressing properties of an object perceived by an actor. It has been observed that resultative adjectives in English and those in Japanese appear in different places in phrase structure. Moreover, it has been claimed that perceptive adjectives are distinguished from resultative adjectives in terms of both meaning and phrase structure.

研究分野：言語学

キーワード：形容詞 叙述 小節 統語構造 英語 日本語

## 1. 研究開始当初の背景

述語の項構造がどのような規則に基づいて統語構造に写像されるかという問題は、統語論研究の中心的な課題の1つであった。生成文法においては、関係文法における非対格動詞の研究の成果を受け、1980~90年代のGB理論やPrinciples and Parametersの枠組みにおいて、動詞の項がどのようにして統語構造に具現されるかという問題が盛んに議論され、人間言語に共通する一定の法則があることが明らかにされた。しかし、名詞や形容詞など、他の語彙範疇の述語の項の写像については、研究者の間で意見の一致が見られていない。

また、複数の述語が項を共有して統語構造に写像していると見られる複合述語の研究も盛んに行われてきた。これまでの日本語の統語論研究において、動詞+動詞や名詞+動詞という組み合わせの複合述語はしばしば注目されて来た(e.g. 影山 1993)。しかし、形容詞や副詞を伴う複合述語の研究はまだ限られており、その仕組みもよく理解されていない。

## 2. 研究の目的

本研究は、日本語の連用形形容詞(または形容動詞)が述語として現れる3種類の構文について、形容詞の項がどのような統語構造に具現されているか考察する。さらに、それらのうちの2種類については、類似した形式を持つ英語の形容詞叙述文と比較し、両者の共通点と相違点について分析することを目指した。

以下、考察の対象とした構文の例を挙げる。まず、[1]に挙げる「する」使役構文では、使役動詞「する」と共起する連用形形容詞が、対格名詞の指示対象が受けた変化の結果状態を記述している。

[1] 「する」使役構文

- a. 太郎が 居間を 暖かく した。
- b. 花子が 台所を きれいに した。

これと同様に、英語には、使役動詞 make と共起する形容詞が対格名詞の指示対象が受けた変化の結果状態を記述する[2]の構文がある。

[2] Make causative

- a. John made the room clean.
- b. Mary made the milk warm.

次に、[3]に示す結果構文では、語彙動詞と共起する連用形形容詞が、対格名詞の指示対象が受けた変化の結果状態を記述している。

[3] 結果構文

- a. 太郎が 屋根を 赤く 塗った。
- b. 花子が テーブルを きれいに 拭いた。

同様に、英語にも、語彙動詞と共起する形容詞が、対格名詞の指示対象が受けた変化の結果状態を記述する[4]の構文がある。

[4] Resultative constructions

- a. John painted the roof red.
- b. Mary wiped the table clean.

さらに、[5]に見る動作主認識構文では、語彙動詞と共起する連用形形容詞が、動作主が認識した、対格名詞の指示対象の性質を記述している。

[5] 動作主認識構文

- a. 太郎が 魚を おいしく 食べた。
- b. 花子が 本を おもしろく 読んだ。

これについては、[6]に示すように、同じような意味を持つ英語の動詞と形容詞を組み合わせても容認されない文となり、対応する構文が英語にはないと見られる。

[6] Perceptive constructions

- a. \* John ate the fish tasty.
- b. \* Mary read the book interesting.

## 3. 研究の方法

上記[1]~[4]の構文については、先行研究で提示されているデータと分析を概観するとともに、日本語および英語の母語話者に例文判断を依頼し、新たなデータを集めた。[5]および[6]については、[1]~[4]および他の構文に現れる形容詞述語と比較しながら、日英語の母語話者およびコーパスからデータを収集した。

## 4. 研究成果

(1) 構文[1]および[2]

これらの構文については、[7]に示すように、対格名詞と形容詞が小節(Small Clause = SC)を形成し、その名詞は形容詞の主語として具現しているという見方が先行研究での一般的な見方であった(Stowell 1983, Kikuchi and Takahashi 1991)。

- [7] a. 花子が<sub>sc</sub> 台所を きれいに]した  
b. John made <sub>sc</sub> the room clean]

しかし、Matsuoka (2010)は、[7]の分析では、[1]の対格名詞が、定形節の形容詞述語の主語として現れる場合とは異なり、動詞の内項としての性質を持つことが説明できないと指摘している。例えば、[8a]に見るように、定形節の述語としての「丸い」の主語は、

数量副詞「いっぱい」によって修飾することができない(岸本 2005)。一方、[8b]に見られるように、同形容詞から派生した他動詞「丸める」の目的語は、同副詞によって修飾される。そして、[8c]に示すように、[1]の対格名詞も同じ副詞の修飾を受ける。

- [8] a. \*紙が いっぱい 丸かった。  
b. 太郎が 紙を いっぱい 丸めた。  
c. 太郎が 紙を いっぱい 丸くした。

本研究では、この他にも[1]の構文と形容詞由来の語彙的他動詞文の共通性を観察し、両者が[9]に示すような、同じ統語構造を持つという分析に至った。

[9] NP-Nom [<sub>VP</sub> NP-Acc [AP V]] v

問題の形容詞は、Vの補部のAPの主要部Aとして生成される(Hale and Keyser 1993)。語彙的他動詞の場合には、Aが顕在的主要部移動によってVを経てvに移動し、一語の動詞となる。一方、[1]の構文では、Aが形容詞のまま具現し、Vだけがvに移動して「する」という形となって音声化される。この分析について、発表論文 にまとめた。

さらに、[2]の構文についても、対格名詞が、[1]の対格名詞と同様に、動詞の内項としての性質を持つことを示唆するデータが得られた。[2]についても[9]の分析を適用することが妥当かどうかについては、今後の研究の課題とする。

## (2) 構文[3]および[4]

構文[4]について、Beck and Johnson (2004)が、[10]の構造を持つと主張している。

[10] NP v [<sub>VP</sub> NP<sub>i</sub> V [<sub>SC</sub> PRO<sub>i</sub> AP]]

対格名詞は動詞の直接目的語として生成される一方、その目的語と同一指標を持つPROが、結果状態を表す形容詞と共に小節を形成する。

[10]の分析の根拠の一つとされているのが、同構文に現れる副詞againの解釈である。Beck and Johnson (2004)によれば、[11]のagainは、動詞句を修飾することもできるが、結果状態を修飾することもでき、曖昧であるという。

[11] Sally hammered the metal flat again.

これは、[10]の統語構造において、againが動詞句に付加することもでき、また小節に付加することもできるためだとされる。

一方、構文[3]については、Tomioka (2009)が、[12]の例を挙げ、againに対応する副詞「また」の解釈が一義的であると述べている。

[12] なおこが 髪を また 黒く 染めた。

この観察は、Tomioka が指摘するように、[3]の構文は、[10]のような、対格名詞(またはそれによってコントロールされる名詞)と結果の形容詞から成る小節を含んでいないということを示唆している。

本研究では、構文[3]について、Baker (2003)で提案されている同種の構文の分析を基にし、[13]の構造を仮定した。

[13] NP-Nom [<sub>VP</sub> NP-Acc [<sub>AP</sub> AP [<sub>AP</sub> A]] V] v

先に[9]で示した形容詞由来の語彙的他動詞の構造を全ての語彙的他動詞に当てはめ、Vはその補部のAPの主要部から派生するとする。その上で、結果の形容詞は、そのAPに付加すると考える。

日本語の結果構文[3]が[13]の構造を持つ一方、英語の結果構文[4]が[10]の構造を持つと仮定することにより、[11]と[12]の解釈の違いが導かれる他、結果の形容詞の選択制限の違いも説明できる可能性を論じた。すなわち、Washio (1997)などで指摘されているように、[4]の形容詞は、[14]に示すように、動詞の意味が含意しない対格名詞の指示対象の状態変化を表すことができる一方、[3]の形容詞は、[15]に見るように、そのような状態変化は記述できない。

- [14] a. John pounded the dough thin.  
b. The horses dragged the logs smooth.

- [15] a. \*ジョンは パン生地を 薄く たいた。  
b. \*馬が 丸太を なめらかに 引きずった。

この違いについて、[4]では結果の形容詞が動詞からは独立して小節内に現れるのに対し、[3]では形容詞が動詞の語根を主要部とする句に付加して、意味的制限が課せられることから生じると論じた。

## (3) 構文[5]および[6]

構文[5]の形容詞について、動詞句前置や対格名詞を修飾する数量詞との位置関係に基いて、構文[1]や構文[3]の形容詞と同様に、VP内に生成されているという結論に至った。この点について、発表論文 に記した。

構文[5]の形容詞は、動詞が表す動作の結果として引き起こされる感覚・感情を表すという意味的観点から、[3]の構文の結果を表す形容詞の一種であるという見方が先行研究で示されている(劉 2012、永谷 2015)。

本研究では、[5]の形容詞についてのそのような分析は、意味的にも統語的にも問題があるということを観察した。意味的には、[5]

の形容詞は、[3]のそれと異なり、対象の状態変化を表さない。例えば、[3a]は、太郎が屋根を塗った結果、屋根が赤くなったことを意味するが、[5a]は、太郎が魚を食べた結果、魚がおいしくなったという意味ではない。

また、統語的には、[3]と[5]の形容詞は、VP 内に現れる位置が異なることを指摘した。[16]に示すように、両タイプの形容詞が共起する場合、[5]のタイプが[3]のタイプに先行する語順は容認されるが、逆の語順になると著しく容認度が下がる。

- [16] a. 太郎は 時計を 興味深く バラバラに 分解した。  
b. \*太郎は 時計を バラバラに 興味深く 分解した。

これは、[5]の形容詞が[3]の形容詞とは異なる種類のものであることを示唆している。この考察結果について、発表論文 に記した。

引用文献：

- Baker, Mark. 2003. *Lexical categories*. Cambridge: Cambridge University Press.  
Beck, S., and K. Johnson. (2004) Double objects again. *Linguistic Inquiry* 35: 97-124.  
Hale, K., and S. J. Keyser. (1993) On argument structure and the lexical expression of syntactic relations. In *The view from Building 20*, ed. by Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser, 53-109. Cambridge, MA: MIT Press.  
影山 (1993) 『文法と語形成』、ひつじ書房。  
Kikuchi, A., and D. Takahashi. (1991) Agreement and small clauses. In *Topics in small clauses*, ed. by Heizo Nakajima and Shigeo Tonoike, 75-105. Tokyo: Kurosio Publishers.  
岸本 (2005) 『統語構造と文法関係』、くろしお出版。  
劉 (2012) 日本語における動作主認識の副詞的成分の特徴: 「\*映画を怖く見ている」とはなぜ言えないのか。『日本語教育』153, pp.81-95。  
Matsuoka, M. (2010) A note on the structure of a *suru* causative in Japanese, 山梨大学教育人間科学部紀要, 第11巻, pp. 298-305.  
永谷 (2015) 「動作主認識の副詞的成分」を再考する。『日本語文法』15-1, pp.3-19。  
Stowell, T. (1983) Subjects across categories. *The Linguistic Review* 2: 285-312.  
Tomioka, Naoko. (2009) Resultatives and the typology of causative predicate. 『結果構文のタイプロジー』, 小野尚之 (編), pp. 451-482, ひつじ書房。  
Washio, Ryuichi. (1997) Resultatives, compositionality and language variation.

*Journal of East Asian Linguistics* 6: 1-49.

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

松岡幹就, 動作主認識の副詞的成分についての一考察: 統語的分布と意味解釈について, 日本語文法, 第17巻1号, 査読あり, pp. 105-119, 2017.

Mikinari Matsuoka, The structure of the resultative light verb construction in Japanese, 山梨大学教育人間科学部紀要, 第16巻, 査読なし, pp. 75-82, 2015.

Mikinari Matsuoka, Doubly-oriented secondary predicates in Japanese. *Japanese/Korean Linguistics*, Vol. 23, 査読なし, pp. 1-10, [http://web.stanford.edu/group/csli/publications/cslipublications/ja-ko-contents/JK23/05Matsuoka.pdf], 2014.

[学会発表](計1件)

松岡幹就, 価値判断の二次述語とモダリティに関する日英語比較統語論, 言語学ワークショップ「日本語統語論研究の広がり」, 2017年3月27日, 筑波大学東京キャンパス文京校舎(東京都文京区)

[図書](計1件)

Halpert, Claire, Hadas Kotek, and Coppe van Urk ed, *MIT Working Papers in Linguistics, A Pesky Set: Papers for David Pesetsky*, 2017, pp. 273-279.

[その他]

所属機関ホームページ 研究者総覧:  
<http://nerdb-re.yamanashi.ac.jp/Profiles/330/0032920/profile.html>

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

松岡 幹就 (MATSUOKA Mikinari)  
山梨大学・総合研究部・准教授  
研究者番号: 80345701